## ３　学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導を目指して

### （１）指導の改善の方向性

古典を読み味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。教師は、生徒の約７割が古典に対して苦手意識をもっているという現状を踏まえ、目の前の生徒に対して古典の授業をどのように展開するのかを、また、古典の授業では何をどこまで指導するのかを、振り出しに戻って考える必要があるのではないだろうか。

本研究では、古典に対する生徒の苦手意識を緩和し、古典の学習に前向きに取り組ませるための第一歩は、学ぶ楽しさを生徒が実感できる学習場面を授業の中に設けることにあると考えた。また、授業の中で学ぶ楽しさを生徒自身が実感することは、古典を学ぶ楽しさの発見に、ひいては、古典がもつ普遍的な価値への気付きにもつながり、そこから古典に対する興味・関心が高まることも期待できるのではないかと考えた。このようなことから、本研究では「学ぶ楽しさを実感させる授業」を以下のように構想した（再掲）。

● 学ぶ楽しさを生徒が感じることができるよう、授業の中に次のような学習場面を設ける
- 生徒が学習内容に対して納得をもって理解することができる学習場面
- 生徒が「学んできた知識を生かせた」などというような実感をもつことができる学習場面

【授業の展開に関する留意事項】
- 言語活動を通して、各科目における指導事項を指導すること
- 近代以降の文章を扱うのと同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、想像力をはたらかせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくような展開を心がけること（語句の意味の理解や文の現代語といった、「文章の表面的な意味をとらえる学習」だけで終わらせないこと）

【教材に関する留意事項】
- 生徒の実態や指導のねらいに応じては、現代語訳なども適切に利用すること

**事例１**は「国語総合」を想定した事例である。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、「調べ学習」、「調べた語句を用いての短文作り」という学習場面を設けた。「うつくし」「らうたし」の語義に合った短文を現代語で作るという言語活動を通して授業を展開する中で、生徒が「うつくし」「らうたし」という古語に対するイメージを自分なりに固められたことが、「をかしげなるちごの、～かいつきて寝たる」の一文を、納得をもって理解することにつながった。「授業後の生徒の感想」からは、学習を通して「うつくし」「らうたし」という語句について納得をもって理解したことで、学習の楽しさを感じた生徒や、古典世界を身近なものとしてとらえ直した生徒がいたことが分かる。また、授業を通して古典作品に興味・関心を示した生徒もいた。

**事例２**は「古典Ａ」を想定した事例である。学んできた知識を生かせたという実感をもたせるため、授業では、既習作品（『大鏡』）の学習を通して得た知識や自らの文法知識などを意識させながら読解を進めていくようにした。人物の心情を話し合うという言語活動を通して授業を展開する中で、自分がもっている知識によって、和歌の解釈が確かなものになったり人物の心情を考える際の視野が広

げられたりしたことで、生徒は「学んできた知識が役に立った」という実感をもつことができたと思われる。「授業後の生徒の感想」からは、和歌が入った作品の学習に楽しさを感じた生徒や、作品世界を自分に引き付けて考えた生徒がいたことが分かる。

また、事例２の「授業後の生徒の感想」には、「自分だけの視点から、自分の都合のよいことしか書かない日記は怖いものだと思う。」という「作品に対する評価」もあったが、これは、作品を解釈する視野が既習知識によって広げられたことから引き出された気付きであると見ることができる。このような気付きは、古典のもつ価値への気付きにもつながり、そこから古典に対する興味・関心が生まれることも期待できる。

事例３は「古典Ｂ」を想定した事例である。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、現代語訳をするだけであると、おそらく生徒が見過ごしてしまうような部分を、ワークシートでの作業やクループでの話合いによって丁寧に読みといていく学習場面を設けた。話し合うという言語活動を通して授業を展開する中で、生徒は筆者の心情や人物像を考えることができた。「授業後の生徒の感想」からは、学習を通して本文の内容をしっかりと理解したことで作品内容に対するおもしろさを感じた生徒や、事例１と同様に、授業を通して古典作品に興味・関心を示した生徒がいたことが分かる。

どの事例においても、学習内容に対して生徒が納得をもって理解することができるような学習場面や、授業の中で「学んできた知識を生かせた」などと生徒が実感できるような学習場面を設けるようにしたことが、学ぶ楽しさにつながっていたと見なすことができる。これらのことから、前頁に示した「学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業」の枠組みは、学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業を構想する方向性の一つとして、妥当なものであると判断できる。

また、各事例からは、生徒が学ぶ楽しさを感じるとともに、古典作品や作品世界を現代の自分たちの感覚や生活につながるものととらえて親しみを感じたり、授業で扱った古典作品自体にも興味・関心を抱いたりしたことも分かる。このことから、学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業を積み重ねていくことは、古典に対する生徒の苦手意識を緩和し、古典に対する生徒の興味・関心を高めることにつながることも期待できる。

ただし、そこで大切なのは、学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業を一過性のものにせず、毎日の指導において「積み重ねていく」ことである。この継続の中で、作品に蓄積されている様々な「知」や、その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味などに生徒自らが思い至ったとき、おそらく、生徒は古典がもつ普遍的な価値に気付くのであり、その気付きは生徒が生涯にわたって古典に対する興味・関心をもつことへの端緒となるはずである。

本研究の各事例の成果や課題から、学ぶ楽しさを生徒に実感させるための授業改善の方策としては、次のようなものが有効であったことが分かった。各校においては、生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり考え方を取り入れたりして御活用いただければ幸いである。

**ア　学習内容に対して生徒が納得をもって理解することができる場を作る**

学習内容に対して生徒が納得をもって理解することは、生徒に学ぶ楽しさをもたらす。言葉を掘り下げる学習活動を通して生徒に納得をもって理解させた事例１や、本文の丁寧な読みときを通して内容をしっかりと理解させた事例３の「授業後の生徒の感想」からは、生徒が学習内容に対しておもしろさを感じていることが分かる。

古典を扱う授業においては、「なぜ古典を学ばなければいけないのか」と素朴な疑問を抱く生徒もいる。古典を学ぶ意義を見いだせないそのような生徒もいるからこそ、古典を扱う授業において、学ぶ楽しさを実感させることは重要になる。

学習内容に対して生徒が納得をもって理解することができる場を、授業の中に設けるようにしたい。

**イ　生徒がもっている既習の知識を文章の読みに生かす場を作る**

古典作品の背景にある当時の文化や習慣に関する知識、既習作品に関する知識、文法に関する知識などというような生徒がもっている既習の知識を授業の中に生かす場があると、生徒は「学んできた知識を使えた」と実感することができる。事例２ では、単元の冒頭で、生徒から平安時代の結婚形態や『大鏡』における兼平のエピソードについて自分が知っていること（学んできたこと）を挙げさせ、それらの事柄を意識させながら作品の読解を進めるようにした。和歌を扱う場面では、自分たちの解釈がなぜそのようになったのかを教師とのやりとりを通して考えさせる中で、自身が学んできた文法知識を使わせるように仕向けた。事例２の「授業後の生徒の感想」からは、和歌が入った作品の学習に楽しさを感じた生徒や、作品世界を自分に引き付けて考えた生徒がいたことが分かる。また、生徒の既習の知識を意識させながら読解を進めたことによって、登場人物の心情を考察する際の視野が広げられたり、文章の読み（特に、和歌の解釈）が確かなものになったりしたと思われる。

自分が学んできた知識は文章の読みに生かせるものなのだと実感することで、学ぶ楽しさが生まれることが期待できる。生徒がもっている既習の知識を文章の読みに生かす場を、授業の中に設けるようにしたい。

**ウ　近代以降の文章を読むときと同様に、生徒が自分なりに文章と対峙する場を作る**

「この作品はこう読むもの」などというような「作品に関する知識」は、作品を読む上での手掛かりを与えてくれることがある。しかし、作品を読む際にその知識にとらわれすぎると、それが逆に先入観となり、純粋に作品を読解することができなくなることもある。そのような状況に陥ると、文章を基にして自分なりの作品像を結ぶことはできない。自分なりの作品像を結ぶためには、自分でその文章と対峙することが欠かせない。

古典を扱う授業では、現代語訳自体はできるものの、訳した内容自体が「分からない」と感じる生徒もいる。だから、古典を扱う授業においては「現代語訳をしたら終わり」とするのではなく、近代以降の文章を読むときと同様に、学習活動を通して生徒が文章と対峙する場を、生徒の実態に合わせて設けることが必要である。授業の中にこのような場があると、文章に対する理解も深まることから、生徒は学習内容に対して納得をもって理解することができる。事例３では、現代語に訳すという「文章の表面的な意味をとらえる学習」だけであると、おそらく生徒が見過ごしてしまうであろう「筆者の心情の揺れ」を、ワークシートでの作業やグループでの話合いを通して丁寧にたどらせた。この過程が、生徒が自分なりに文章と対峙する学習場面となり、生徒が学習内容に対して納得をもって理解することにつながった。

古典を扱う授業においても、近代以降の文章を読むときと同様に、生徒が自分なりに文章と対峙する場を、授業の中に設けるようにしたい。

**エ　生徒が言語活動を通して学び合う中で、自分の考えを広げたり課題を乗り越えたりする場を作る**

言語活動を通して学び合う中で、他者の見方に対して共感したり、疑問に思ったり、そこから新たな視点を得たりすることで、自分の考えは広げられられていく。また、生徒同士で教え合ったり説明し合ったりする中で、自分の理解が深まったり、自分だけで取り組んだとしたら乗り越えられない課題を、学び合いを通して乗り越えられたりもする。事例１、事例２、事例３ ではグループ活動による学び合いの中で、生徒は、一人で作業をしたら行き詰っていたかもしれない課題をやり遂げることができた。また、言語活動を通して学び合う中で、自分以外の見方や考え方があることに気付かせることもできた。

生徒同士が言語活動を通して学び合う中で、自分の考えを広げたり課題を乗り越えたりする場を、授業の中に設けるようにしたい。